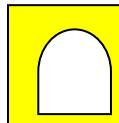


日吉台地下壕保存の会会報



第149号
日吉台地下壕保存の会

キャンパスの戦争遺跡 一慶應義塾に「要望書」を提出一 会長 阿久沢 武史

今年もコロナ禍の中で新しい年を迎えました。北京オリンピックでの日本人選手の活躍に一喜一憂し、その「平和の祭典」が終わった直後に、ロシアがウクライナに侵攻しました。その日(2月24日)、私はガイドの皆さんと勤務先の慶應義塾高校の地下壕見学会を行ないました。学校行事の一環として、24・25日の2日間で計4回、108人の生徒と8人の教員を案内しました。ロシアの軍事行動は想像を超えた速さで進み、瞬く間に制空権を掌握、地上部隊が国境を越えました。帰宅後、テレビにはミサイル攻撃で燃え上がる炎や砲撃の轟音、警報のサイレン、破壊された軍事施設や民間の集合住宅、そして地下鉄や防空壕で身をひそめる市民の姿が映し出されていました。それは昼間に地下壕で語った77年前の戦争と驚くほど重なるものでした。私はこれまで何度も地下壕に入りましたが、過去と現在(現実)があのようない形で一致した体験は初めてです。「戦争が早く終わってほしい、死ぬのは嫌だ。」と防空壕の中で泣きながら話すウクライナの少女の姿が頭から離れません。戦争が始まったその日に、自分が通うキャンパスの戦争遺跡を歩いた日本の高校生たちは、何を感じ、何を考えていたのでしょうか。日吉は戦争末期の行き詰った状況の中で、特攻に象徴される絶望的な作戦を発した者たちがいた場所です。なぜもっと早く戦争をやめることができなかつたのか、そもそもなぜ戦争を始めたのか。日吉で向き合うことになるこうした問題は、平和な社会を破壊する現代の蛮行に対して、明確に「反対」を唱える姿勢につながります。世界情勢が混迷を深めれば深めるほど、キャンパスに残る戦争遺跡の教育的な活用は、大きな意味を持つのだと思います。

*

*

*

昨年の11月29日、私たちは慶應義塾に対し「日吉台地下壕の史跡・文化財指定に関するお願い」(以下「要望書」)を提出しました。日吉台地下壕が国や自治体によって史跡・文化財指定を受けるのは会の発足以来の悲願であり、30年以上にわたって活動の柱にしてきたこともあります。提出にあたって塾長ほかお二人の常任理事と面会し、約1時間にわたって日吉の戦争遺跡の現状を説明しました。出席者は、私の他に安藤広道さん(文学部教授)、大出敦さん(法学部教授)、都倉武之さん(福澤研究センター准教授)で、「要望書」もこの4人の連名でした。問題意識を共有する教員有志が、学内の所属や専門分野の壁を超えて、横のつながりを深めながら準備したものです。今回の要望は会単独のものではありませんが、このように協働でまとめたことは大変意義のあることだと思います。特にお願いしたのは、次の2点となります。

【目次】

<u>卷頭言【1-4p】</u>	キャンパスの戦争遺跡・慶應義塾に「要望書」を提出 - 会長 阿久沢 武史
<u>資料調査【4-6p】</u>	海軍瀬谷補給工場(その後) ガイド 岸本 正
<u>報告【6-9p】</u>	「横浜海軍航空隊」の遺跡を訪ねて 運営委員 岡本雅之
<u>報告【9-10p】</u>	小笠原の震洋隊基地を探る ガイド 中田 均
<u>連載【10-13p】</u>	☆設備アレコレ(33)特攻隊最後の通信「長符連送」の送信方法 運営委員 山田 譲
	☆海外の戦跡めぐり(19)阿片戦争の裏部隊・マカオ 運営委員 佐藤宗達
<u>報告【14-15p】</u>	一般公開された「一式双発高等練習機」 運営委員 小山信雄
<u>活動の記録【16p】</u>	2021.11~2022.3

- (1) 日吉台地下壕の史跡・文化財指定に向けて、義塾から自治体への積極的な働きかけ
 (2) 日吉寄宿舎(中寮・北寮・浴場棟)の保存と再利用

日吉台地下壕が戦争遺跡として歴史的価値を有するのは揺るぎない事実ですが、いまだに史跡や文化財の指定を受けていません。かろうじて横浜市教育委員会が周辺のエリアを「埋蔵文化財包蔵地」に登録するにとどまっています。キャンパスに残る貴重な戦争遺跡を長く保存し、研究や教育の分野で活用するためには、慶應義塾が主体となって自治体との間に太いパイプを作り、積極的な働きかけをする必要があります。

加えて、現時点での深刻な問題に寄宿舎の荒廃があります。南寮と浴場棟は、2011年に横浜市から歴史的建造物の認定を受けました。南寮はリフォームされて現在も学生寮として使われていますが、「ローマ風呂」のある浴場棟は荒廃が進み、保存が危ぶまれる状態になっています。中寮と北寮も同様で、南寮で生活する学生にとって安全面・環境面で好ましい状態とは言えません。近代日本を代表するモダニズム建築を再生し、教育的に有意義な施設として利用できるよう検討することが急がれます。

日吉キャンパスの戦争遺跡は地下壕だけではありません。校舎・寄宿舎・チャペルなどの地上の施設も海軍によって使われ、敗戦後は米軍が入りました。地上と地下をセットでとらえなければ、ここにあった「戦争」の全体像を把握することはできません。(1)と(2)を併記した根底には、そうした理由があります。もちろん日吉台地下壕の史跡・文化財指定を求めるとき、その範囲については慎重な議論が必要です。「日吉」という地域全体なのか、キャンパス内にとどめるのか、複数ある地下壕群のすべてを対象とするのか、現在唯一見学可能な連合艦隊司令部地下壕に限定するのか。今回は慶應義塾に対するお願ひですから、「キャンパスの戦争遺跡」という観点から「要望書」をまとめました。

さかのぼって2008年9月、キャンパスの通称「蝮谷」に体育館が建設された際に、航空本部等地下壕の出入口が発見されました。慶應義塾はただちに発掘調査を行い、有識者による諮問委員会を設け、翌2009年1月に地下壕の保存と活用に関する答申(提言)を受けました。そこに次のような一文があります。

地下壕の調査・研究が進み、その活用の体制が整備されてくれれば、近現代史研究のみならず、歴史教育、平和教育に対する慶應義塾独自の取り組みが可能になってくるはずである。

この答申から13年が経ちますが、肝心の「慶應義塾独自の取り組み」について、いまだに具体的な成果を社会に向けて発信できていません。一般に戦争遺跡は「負の遺産」と言われますが、これを積極的に保存し活用することで、慶應義塾ならではの研究と教育を展開できるはずです。

かつてこのキャンパスで学んだ塾生の思い出や戦争体験、日吉の地域住民の方からの聞き取り、空襲の被害調査など、日吉と戦争に関するアーカイブは相当な蓄積となっています。そのほとんどは、私たちの会の30年以上に及ぶ地道な活動の成果でもあります。これらを研



作戦室での説明

究・教育の資源に加えることで、2015年に国連総会で採択された「持続的な開発目標（SDGs）」のうちの目標16「平和と公正をすべての人に」に深く関わる魅力的な教育を社会に向けて問うができるのではないかでしょうか。それはもちろん国際社会から暴力や差別、軍事力による衝突をなくし、戦争に対して明確に「反対」の意思表示をし、将来に向けて平和な社会を築くために必要な教育の形でもあります。現時点では慶應義塾からの回答はいただいておりませんが、新しい動きがありましたら会員の皆様にお伝えしてまいりたいと思っております。

昨年はコロナによって一般の方を対象とする見学会を停止せざるをえませんでした。一方で慶應義塾内の研究・教育を目的とする見学の許可は出ていましたので、感染防止対策を徹底しながら



地下壕の扉



高校玄関床の「ワシ」の説明（2月24日高校見学会）

複数回の見学会を実施しました。そうした中で、ようやく定例の見学会も一部再開可能となり、今後は月に1回（第4土曜日）、最大25名に限る形で実施することを予定しています。地下壕の扉は少しだけですが、再び開かれました。現在、見学会再開に向けて準備をしておりますので、体制が整いましたら、あらためてお知らせいたします。

*

*

*

さて、ここで2月24・25日の見学会を終えた後の高校生の感想をご紹介します。

- ウクライナ情勢が悪化してきており、誰もが戦争というものが他人事では無いということを再認識していると思う。この21世紀においても、敵の空爆を恐れ、防空壕に逃げている人々がいると思うと、この日吉にある地下壕の見方が大きく変わってきている。単なる戦争遺跡なんかでは無い。何か僕らに伝えようとしているのかもしれない。戦争は過去ではない。現在も続いている。本当に悲惨なことしか起こらないと強く思った。
- 一番印象に残っていたのは、「地下壕内で戦況をとらえていた」ということである。戦艦大和が傾いて行く様子を地下壕の通信室で受信していたという話があった。リアルタイムで大和が沈む、即ち、大和の乗組員が死んでいく。仲間が死んでいくのを聞くだけで何もできないほど、苦しくつらいものはないだろうなと感じたとともに、自分と同じくらいの年齢の兵士がこの場所で働いていたと考えると、本当に心が苦しくなる。今、ウクライナにロシア軍が侵攻しているというニュースが流れてきた。ロシアが口実を設けて一方的に武力を用いて戦争をはじめたものであるが、これは第二次世界大戦とよく似ていると思う。僕は本当の「栄光」は平和な生活そのものであると感じ、学校に行けて、部活に行けて、家に帰れる生活を当たり前にじやなく素晴らしいことなどと感じて日々を過ごしていきたい。

見学会では上原良司の「所感」も読みました。キャンパスに残されたモノとしての遺跡だけでなく、そこで学んだ人（自分たちの先輩）が遺した言葉にもふれてほしかったからです。

「所感」は慶應で学び、学徒出陣で陸軍のパイロットになった22歳の青年が、特攻出撃の前夜に書いた文章です(『新版きけわだつみのこえ』岩波文庫、所収)。

○残念ながら、今この瞬間もロシアはウクライナというひとつの主権国家への侵略を進めている。いや、ロシアというよりもプーチン政権が侵略を進めているといったほうがより正確かもしない。なぜならば、ロシア軍兵士も含めたロシア市民の一部はこの戦争に賛同していないからだ。YouTube である動画を見た。ウクライナ人女性がロシア兵に詰め寄るというものだったのだが、ロシア兵は直接言わないものの、その雰囲気から自分たちだってやりたくてやっているわけではないという意思を感じ取ることができた。これはまさに上原さんが「所感」を書かれた時の気持ちと類似したものではなかろうか、私はそう思った。戦争というと、侵略された側の被害状況などが報道されることが多いが、侵略する側にも甚大な被害が出ることは言うまでもない。侵略をされる側のみならず、する側の兵士たちも皆、家族がいて友人がいて大切なものを持っている。つまり、戦争が始まった時点でバッドエンドを選ぶことはできても、ハッピーエンドがくることは絶対にありえないということだ。「所感」やロシア兵の気持ち、あるいは避難したウクライナ人の話、どれを聞いても戦争は絶対に起こしてはならないものであることは明白だ。地球上の誰もが安心して寝ることのできる、そんな世界がくることを心から願っているし、この考えが世界中に広まることを期待している。

このように地下壕の見学は、きわめて現実的な意味を持つものです。ただしそれは不幸にも平和な世界の実現が人類にとってまだ困難な課題であることも示しています。日吉台地下壕を訪れた人々が、年齢や社会的立場に關係なく、ここから聞こえる歴史の声に耳を澄ませるとき、誰もが平和な社会を持続させたいと強く願うと思います。国際社会が緊張感を増し、この国の在り方が問われる中で、真に歴史の声に耳を澄ますべきなのは、本当は中高生や小学生ではなく「大人」と呼ばれる私たち自身なのかもしれません。

資料調査

海軍瀬谷補給工場(その後)

ガイド 岸本 正

前回会報148号にて報告させていただきました瀬谷補給工場ですが、その後参考にした図書『地図で辿る瀬谷の移り変わり』の編者である横浜地図くらぶ主催田中常義様(元横浜市港湾局)と連絡がつき、詳しい資料を提供していただくとともに現地案内を受けることができましたので、その後の知見を報告します。

戦争関連遺物として現地に遺るのは以下5点であることを確認しました。

- ①水槽と思われるコンクリート構造物
- ②容器の支持台と思われるコンクリートブロック
- ③旧米軍オペレーションビル内にある覆土式倉庫(掩体壕)
- ④煙突基礎と思われるコンクリート製構造物
- ⑤地下水槽と思われるコンクリート製地中構造物

国道16号線との接点付近にある①②については前回おおまかに報告しましたので、今回は③④⑤について記します。位置関係は下の通りです。③④⑤は海軍道路東側、細谷戸住宅北側の旧米軍オペレーションビル付近にあります。このうち、③は現在国の管理地内でフェンスで囲まれているため立ち入ることはできません。GoogleMapで見ると細長い長方形状の覆土が確認できます。防衛省の記録によると、ここは旧日本海軍時代「特薬庫」と呼ばれ毒ガス弾が保管されていたとのことです。寒川にあった相模海軍工廠で製造されていたものかどうか、またなぜ覆土式倉庫を取り入れたのかなど調査の余地があります。④は、草地の中にあり間近に観察することができます。



四方3m高さ3.5mのコンクリート製基礎と思われ、上部に煙突を支えていたと思われる台形状の構築物があります。内部は空洞になっていて空気取り入れ口と思われる一辺が0.5mの四角窓が南面に4個、北面に2個開けられています。興味深いのは、北側に側溝のようなものがあり、西側にある③と繋がっていたことが想像されます。今後発掘調査が行われれば明らかになることと思われます。さらに⑤は④の北側10mほど離れた位置にあります。中央角型のマンホール状穴には蓋がなく、地中内部を観察することができます。一辺の長さや深さも相当あり大きな地下構造物であることがわかります。これらの遺構は、③以外明確な用途は判明しておらず、それぞれの遺構の関連性も不明です。他施設（広島県大久野島など）の状況や専門家の研究などに基づいて今後解明されることが期待されます。そのためにも、保存されるべき遺構であると思います。



なお、2021年11月18日東京新聞朝刊ミラー欄に「戦争関連遺物の保存を」との題名で拙稿が掲載されました。現在のところ、直接の反応はありませんが、花博に向けての交通システムの頓挫など何かと話題の多い地域ですので、今後も多方面からの注目を集めこの問題について市民の関心が高まるとよいと思います。

なお、2021年12月28日に当会亀岡氏、山田氏、岡本氏と現地を視察してきました。その結果①は火薬庫などの火災に備えた防火用水の貯水槽であろうこと



米軍施設として使われていた頃

岸本 正 68
(横浜市旭区)
横浜市が、一〇二七年の
国際園芸博覧会(花博)の
開催を目指し、瀬谷・旭西
区の旧米軍上瀬谷通信施設
跡地で開発を進めようとして
います。しかし、当該地
は米軍施設として利用され
る以前に、旧日本海軍の軍
事施設がありました。が、一
般にはあまり知られていない
かもしれません。

戦争関連遺物の保存を

しかし、花博によつてこの土地は「公園・防災ゾーン」として開発されることがになっています。私は、貴重な戦争関連遺物が撤去されてしまつのではないかと懸念しています。イベント開催による地域の活性化も大切ですが、戦争の記憶を思い起すことができるの」れらの施設の保存を、当局に要請します。

るための施設) も、旧米軍の通信アンテナコントロール施設敷地に現存しています。これらの場所は、現在国有地として管理され、近くには煙突の基礎や地中水槽と思われる大きなコンクリート製構造物も残存しています。残念ながら、これららの施設の用途など詳しいことは判明しません。今後の研究が期待されます。

山田氏や岸本はひき続き以下文献資料などから解説を進めています。

- ・樋口健二『毒ガスの島』『寒川町史（近現代編）』『寒川町史研究6,8,10』『相模海軍工廠』
 - ・日本地図センター、戦後早い時期の地図 横浜市役所提供的、同空中写真 など

さらに、本年2月には大山しょうじ市会議員、横浜市教育委員会生涯学習文化財課、都市整備局上瀬谷整備推進課に一連の資料を送付し、遺構の重要性を認識していただくとともに保存要請へ向けての活動が開始されました。

報告 連合艦隊司令部の移転候補地のひとつ「横浜海軍航空隊」の遺跡を訪ねて
運営委員 岡本雅之

横浜市金沢区、富岡総合公園はJR根岸線「新杉田」駅から横浜シーサイドラインで一つ目「南部市場」下車、徒歩5分のところにある。

訪れた昨年11月下旬の土曜日、小高い丘の上の運動公園は虫取り網をもった子供達でぎわっていた。また幼稚園児の散歩コースでもあるようだ。

「横浜海軍航空隊」については、「日吉台地下壕」のガイドで《連合艦隊司令部がなぜ移設先に日吉の地を選んだか》の説明で、他の候補地として、大倉精神文化研究所、町田の玉川学園、そして「横浜海軍航空隊基地」などがあったと説明している。名称は知っていたが、何処に、どんな部隊かなどの認識はなかった。たまたま大倉山の書店で見つけ購入した本により横浜海軍航空隊の歴史を知ることができた。(*『語り継ぐ横浜海軍航空隊』著・大島幹雄、有隣新書。

横浜海軍航空隊は昭和11年10月発足した。通称「浜空」は飛行艇の航空隊として東京湾の一角、波静かな根岸湾に面したクツモ岬と呼ばれた総面積45万坪の土地に建設された。

起工式は昭和9年(1934年)11月10日。そして起工式から2年後、昭和11年10月1日に正式に「横浜航空隊」が発足する。

現在、富岡総合公園の桜として市民の憩いの場となっている桜並木はこの「浜空」発足時に隊員たちの手で植樹されたものだ。並木沿いの車道に元横浜航空隊の門が残され、その先に「桜の由来」、「浜空神社の由来」それに「浜空」の三つの碑があり、かつてここに「横浜海軍航空隊」の基地及び神社があり、その海は飛行艇が飛び交っていた場所であったことを教えてくれる。

公園ふもとの道路沿いには大きな倉庫のような建物があり(全長170m)、これは昔、飛行艇の格納庫だとのこと。(現在は神奈川県警第一機動隊の倉庫として使われている、内部の見学は出来ない)。

ここでは三つの碑について詳しく説明し、最後に浜空の戦歴について簡単に触れることにしたい。

「桜の由来」碑(以下碑文)

この桜は昭和11年10月横浜海軍航空隊がこの地に開隊された時隊員の手で植樹され大切に育てられたものである

年々歳々花変らねど
征きて還らぬ戦友多かりき



飛行艇(二式大艇)



「桜の由来」碑

「浜空神社の由来」碑(以下碑文)

昭和11年10月1日飛行艇隊の主力として横浜海軍航空隊が当地に開設されたその守護神として造営されたのがこの浜空神社である。昭和20年8月15日大東亜戦争終結後当航空隊跡地は横浜市富岡総合公園として生まれ変わったのである

(中略)

横浜航空隊は浜空神社を中心とした広大な陸上の敷地と現在埋立てられた根岸湾に水上の飛行艇発着場を専有していた隊員約一千名大型飛行艇24機を有する海軍最大の飛行艇専門航空隊としてその威容を誇ったものである。今なお隊門付近の桜並木と飛行艇大格納庫が当時を偲ぶ面影を残し訪れる者に静かに語りかけてくれる(後略)
昭和63年1月建立



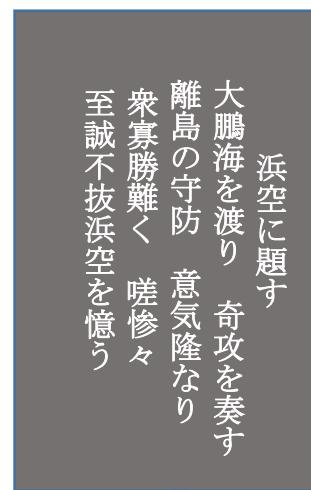
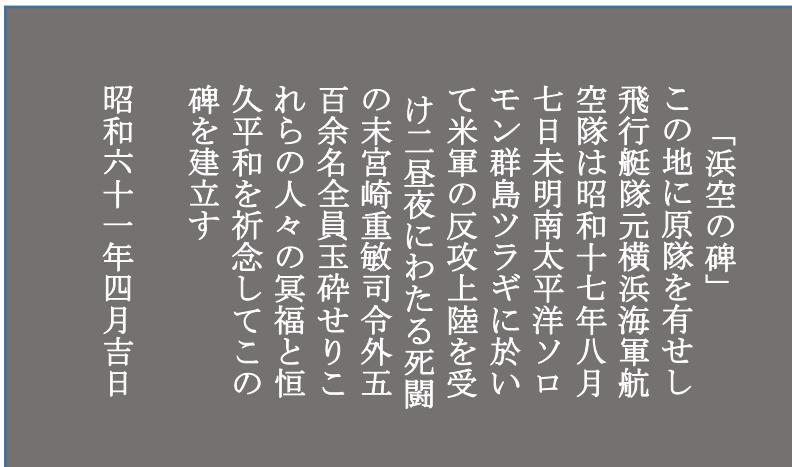
「浜空神社の由来」碑

そしてもう一つ「浜空の碑」はツラギにて玉碎した横浜海軍航空隊宮崎重敏司令以下700余名の鎮魂の碑である。この碑は昭和61年4月に建てられたもので、昭和46年に戦没者慰靈の

ためにツラギを訪れた元南東方面艦隊司令長官草鹿任一中将が詠じた詩が刻まれている。

「浜空」と題した漢詩である。読み下し文を記す。

そして碑の裏面には次の字句が刻まれている。



これらの碑と正門・桜並木及び元格納庫の建物だけしか「横浜海軍航空隊」を偲ぶものは残されていないが、前記『語り継ぐ横浜海軍航空隊』にはこの航空隊の輝かしい戦歴（真珠湾攻撃の後、12月9日のアメリカ領爆撃・三ヶ月後の再度の真珠湾ヒッカム飛行場爆撃等）はここではふれない。昭和17年5月3日に呉鎮守府陸戦隊がツラギに上陸、占領した。（ツラギはガタルカナル島の北方40キロにある長さ3キロ、幅0.8キロの小島）

「浜空」は7月上旬、宮崎大佐以下約380名がツラギに進出、その他病院班・舟艇班・工作班約100名、二式水戦隊60名が駐留し、哨戒任務を担った。

日本軍によって建設中のガタルカナル島の飛行場を米軍が発見し、これを阻止する為に上陸作戦が準備される。

8月7日、早朝、午前4時25分、ツラギ島への空爆から始まり、5時15分、米軍の上陸開始。6時10分、「敵兵力大最後の一兵迄守る 武運長久を祈る」の電文を最後に通信が途絶える。このツラギの玉碎はガタルカナル島の戦いの序曲となった。

ツラギ玉碎によって「浜空」は消滅した。

昭和17年10月1日に横浜において再建されたが、殆んど新編成の部隊であった。航空隊の呼称が変わり浜空は第八〇一（はちまるいち）海軍航空隊と呼ばれる。富岡の部隊は第801海軍航空隊横浜派遣隊となる。

飛行艇部隊はその後いくつかの新設や編成替えが繰り返されるがここでは触れない。ただ浜空の飛行艇（二式大艇）が使われた「海軍乙事件」について簡単に触れておきたい。

ご存知の方も多いと思うが「海軍乙事件」とは、山本五十六の後任の連合艦隊司令長官古賀峯一大将が移動中に行方不明となった事件。

昭和19年3月30日、連合艦隊司令部のあったパラオが大空襲をうけ、司令部幹部がミンダナオ島ダバオに移動し司令部をあらたに立ち上げようとする。幹部の輸送に使われたのが二式大艇であった。司令長官以下8名が乗った一番機は通過中の低気圧に遭遇し燃料切れ、洋上で行方不明。福留繁参謀長以下11名が乗った二番機は目的地にはついたものの現在位置が分からず燃料がつきて海岸近くに不時着。泳いで岸にたどり着くがフィリピン現地人のゲリラにつかまり捕虜になる。携行していた機密文書「連合艦隊機密作戦命令第七三号」と暗号関係の機密書類をゲリラに奪われるという大失態を演じた。

その後終戦まで海軍飛行艇部隊は従来の哨戒・偵察任務の他、特攻攻撃の誘導部隊として特攻に参加する。

富岡は何度か空襲を受け、特に5月29日の横浜大空襲では大きな被害を出した。横浜基地の飛行艇は殆んど破壊されてしまい、八〇一空の大半は山陰・美保航空基地へ移る。

昭和17年から生産をはじめ、170機製造された二式大艇は終戦時わずか3機を残すだけだった。最後の1機は終戦後アメリカに運ばれノーホークに保管されていたが、昭和54年7月10日、日本へ返還され、東京・台場「船の科学館」横に復元展示された。はるか昔に私も観に行った記憶がある。その後、平成16年4月からは鹿児島県・鹿屋航空基地史料館に展示されているとのことだ。



富岡総合公園正門

「浜空」跡地、富岡は戦後米陸軍第五〇八通信修理施設隊施設として接收され、昭和36年12月からは富岡倉庫と名称を変え接收が続いた。返還されるのは昭和46年2月のこと、その後全面返還されるのは平成21年5月25日である。46年返還時に横浜市は、道路や緑地として富岡総合公園を誕生させる。県は神奈川県警察第一機動隊の訓練所や宿舎として利用し、国は公務員宿舎などを建設した。

現在は正門と元格納庫だった建物しか残っていないが、詳述した「三つの碑」を見るとかつてここに海軍航空基地があり、戦争があったことがよくわかる。ここ「富岡総合公園は」大切な戦争遺跡のひとつではないだろうか。

2022年2月 記

報告

小笠原の震洋隊基地を探る ～要塞化された陣地～

ガイド 中田 均

本土決戦に備えて海軍は、水上特攻艇「震洋」を約6,200隻生産し、敵の上陸に備え太平洋岸に146個の部隊を配備しました。小笠原では5つの震洋部隊が配置されました。今回の調査では、父島や母島で第一から第四震洋隊の基地跡を4つ確認することができました。

《第一震洋隊：父島釣浜》

父島にある都立小笠原高校前の坂を登ると電信山遊歩道へ着きますが、途中の駐車場から釣浜まで急な階段を降りると、中腹に広い洞窟が残っていました。段差のある3つの部屋からなり、「士官室、発電機室、電信室、兵舎」でした

(右写真)。海岸には複数の震洋格納壕があり、左岸沿いの洞窟は奥まで掘られ複雑な構造となっていました。上陸する敵兵に向かって洞窟にある砲台や機銃が向いていました。

《第二震洋隊：父島宮ノ浜》

父島の大村から徒歩でも行けアクセスがよくダイビングやシュノーケリングのスポットが宮ノ浜です。岸を周遊できる遊歩道沿いに5つの震洋格納壕がありました。震洋艇を並列して格納できるくらいの広さの壕でした。さらに、敵の上陸に備え、海岸中央部の道路脇に平射砲が、右岸岬の高台には機銃口を確認できました。ここでは、昭和20年5月B29の焼夷弾攻撃で火薬庫が被弾し6名が死亡しました。



《第三震洋隊：母島西浦》

母島新夕陽ヶ丘の手前、「西浦」という標識がある道路脇にバイクを置いて、海岸まで沢にそってほそい急な道を下ると小川に沿った谷地に3つの倉庫壕が構築されていました。壕には、発動機やレール・車輪、カラのドラム缶が詰まっていました。浜にあった5本の格納壕は、戦後東京都の要請で自衛隊によって爆破されているという。大発艇（近海用の発動機艇）の残骸が入っていた壕にはたどり着きましたが、急峻な崖に囲まれているので兵舎はどこにあったのでしょうか。ここでは、終戦直後の爆発事故で30名近い隊員が犠牲になっていました。



《第四震洋隊：母島東港》

母島元地からバイクで北に向かって30分ほど。途中には東港の防衛にために設置された高角砲3門と探照灯（サーチライト）が残っています。到着した東港の整備された岸には一隻の漁船が横たわっていました。台風時の避難場所だそうです。東港・桐浜の横に大きな洞窟を発見、洞窟内の地面にはしっかりとレールが残っていました。レールは、かつて捕鯨基地時代のものと思っていましたが、小笠原村教育委員会の報告書で確認したら、震洋艇を運搬するためのレールでした（左写真）。壕内に入ると空気がどんよりとなま暖かかく不気味でしたのですぐに壕から出ました。

父島の巽湾にあった第五震洋基地跡については未調査ですが、父島の大村・二見湾に近い、釣浜・宮ノ浜基地は、敵の上陸に備えて機銃や砲台などが併設された複合的で要塞化された陣地だったのです。小笠原での地上戦が本気だったことがわかりました。

連載 地下壕設備アレコレ (33) 特攻機最後の通信「長符連送」の送信方法
運営委員 山田 譲

アジア太平洋戦争末期の特攻作戦で、特攻機の搭乗員は米軍の艦船に向かって突入する直前に、モールス通信で「ツ——」という発信音を送信していたことが知られています。日吉の連合艦隊司令部の地下通信室で勤務した電信兵だった方は、「これを聞くと、たまらない気持ちだった」と語っています。この発信音が途絶えた後、その特攻隊員の命が絶えたことを知っていたからです。

この発信音は「長符連送」といいます。モールス信号の「トンツー」の短音「トン」は短符、長音「ツー」は長符といいます。たとえば「突撃せよ」は、「ト」(・ー・)をくりかえすので「ト連送」といいます。これと同じで、長符を続けて発信すれば「長符連送」です。

◎電鍵を押したまま特攻隊員は突入するのか？

これについて見学ガイドの遠藤美幸さんから質問がありました。「特攻隊員は特攻突入の時、電鍵を押したまま突入するのか？ 肘で電鍵を押していたという話もあるがどうなのか？」ということでした。電鍵というのは電信を送信する時に使う器具です。小さなテコのような形で、端に円盤型の押す部分があり、ここを押すと電気が流れます。これを短かく、あるいは長く押して短音、長音を出し、それを短波などの電波に乗せて通信文を発信します。ですので、この電鍵を押しっぱなしにすると「長符連送」になります。

私は電鍵を何かで固定していたのかなと何となく思っていたのですが、遠藤さんに言われて確かにこれはわからないことだなと思いました。他の方からは「ゼロ戦の操縦席の通信機には電鍵はないようだ」という話もあり、それは変だなあと思い、ゼロ戦のメカのオタク本

を見てみました。またインターネット情報検索でも調べてみました。

ところで海軍の軍用機に取り付けられていた通信機はどんなものだったのでしょうか。ゼロ戦などの単座式軍用機の場合だと、『軍令部通信課長の回想』(鮫島素直著)によれば、96式空一号無線機と3式空一号無線機です。これはどちらも電信・電話兼用です。『ゼロ戦のメカニズム』(宮崎賢治著)と『ゼロ戦 VS グラマン』(野原茂著)には、両機種とも書かれています。

さしあたり特攻機の無線通信の話なので、通信機は戦争後期に使われた3式空一号無線機になります。この無線機の管制器は操縦席右側にあります。インターネット情報の「軍医少尉の資料館」には「海軍三式空一号無線電話機・管制器」の実物写真がありました。これを見ると、いろいろなセレクターがついています。「送受転換」セレクターで受信と送信を切り替えます。「受話器」セレクターでは電信と電話と待受けを切り替えます。「送話器」セレクターも電信と電話を切り替えます。このセレクターには「楽音」という意味のわからない切り替えもあります。何かの音を送信するのでしょうか。広辞苑で見ると「楽音」とは「規則正しい振動がある時間継続し、そのため確実な音の高さがわかるような音」と書かれています。送受信の調整や確認のための送信音なのでしょうか。もしかすると長符連送は、この「楽音」なのかもしれません。そのほか「音量調整」ダイヤルと「音調」ダイヤルもあります。

そして後ろ寄りの端に「電鍵」という記名のある押しボタン式の丸い形のスイッチが付いています。このボタン型押しスイッチでモールスの電信送信をしたようです。これは普通の電鍵とはかなり形状が違います。押しっぱなしになるように、何かで固定しようとしても難しそうです。ゴムバンドのようなものを巻き付ければ、できるかもしれません。

以上からすると、電鍵を使って長符連送を送信するには、目標発見の後、しばらく手で押しっぱなしにして、その後は手を離して操縦に専念するということになります。しかし、先の「楽音」を使うのだとすると電鍵操作無しで長符連送を出し続けることができます。今のところ、この二つの可能性があると思いますが、これは実際に通信機を操作していた経験者に聞かないとわからないですね。

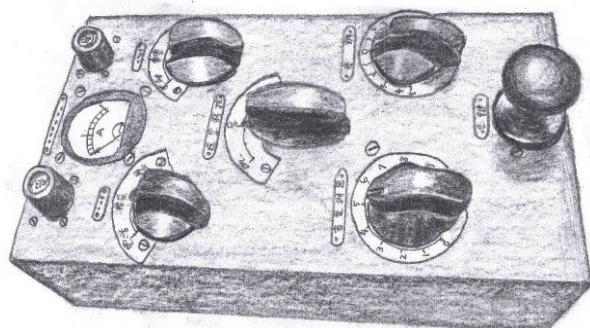
◎「長符連送」は特攻隊の「戦闘詳報」に記載

「長符連送」は特攻作戦の「戦闘詳報」にも書かれていて、海軍の記録文書で使われている言葉です。ですので特攻開始の報告として送信することを定められていたようです。

昭和20年4月8日(戦艦大和沈没は4月7日)に作成された「第131海軍航空隊戦闘詳報第13号 串良基地における菊水1号作戦」には、「神風特別攻撃隊第三御盾隊131部隊姫路隊」の「攻撃経過概要」として、4月6日に2番隊2号機から「我戦艦ニ体当リス長符連送と打電アリタル儘連絡絶ユ」。3番隊1号機から「我戦艦ニ体当リスト打電 長符1分間連送後連絡絶ユ」。その他、多数機が「長符連送シタル儘連絡絶ユ」と書かれています。

この特攻機の最後の通信は陸軍も同様だったようです。『背振の雲 飛燕の思い出』(特操目達原会編)には、第54振武隊の小野清氏が

回想記を書いていますが、それには「整備兵は突入時の無線信号…を伝え」とあります。これは特攻出撃の搭乗時に「長符連送」を伝えたということだろうと思います。1945年2月頃から陸軍の飛行隊も海軍の第二航空艦隊の指揮下に入ったと『雷撃機電信員の死闘』(松田憲雄著)には書かれています。



海軍3式空1号電信電話機の管制器
(右端のボタン型スイッチが電鍵)

◎「長符連送」直前の「敵艦発見」略語通信

ところで先に引用した「戦闘詳報」には「我戦艦ニ体当リス」と書かれているのですが、この通信にも略語が使われていました。これに関するテレビ番組が昨年12月3日にNHK BSプレミアムで放送されました。「池上彰 零戦講義 高校生との対話」という番組で、鹿屋串良の海軍の地下壕電信室の場面で、モールス信号の再現音が流されました。「我空母発見せり」の後に「ツ——」というものです。私は録画していなかったのですが、ガイドの岩崎晴樹さんが録画していて、通信音を確認してくださいました。それによると「—・・—・—・—・—・—・—」だったそうです。これは「ホタ連送」の後、長符連送となります。ですから「ホタ」が空母発見の略語ということになります。

ところがこの略語は全海軍共通ではなかったようです。『海軍通信作戦史』(第二復員局残務処理部史実班編・石黒進著)によれば、「特攻機隊通信」として「敵発見と突入直前を基地に報告するだけで……簡単な略語を放送するのが精一杯となり、各部隊で各個に略語を制定した。しかしこの略語制定に当って、艦隊として統制せず末端の飛行隊任せとなつた……司令部等においては各隊の略語を壁一面に張り廻らして対照受信する繁雑性を生じ、また他の部隊では傍受するも意味不明で戦況判断に支障を來す」というありさまだったとのことです。ですから先の「ホタ」連送も当該部隊でしか通用しない略語だったのでしょうか。いやはや何とも、ですね。部隊間の情報共有ぬきにバラバラに戦争をしていたということです。

それはともかく、長符連送が途切れた時、特攻隊員はまだ生きていたのかどうかは、定かではありません。しかし、それが最後の通信であったことだけは間違えないことです。それを地下壕のなかでレシーバーのかすかな音で聞いていた電信兵は、「長符連送」と書きとめていたわけです。その通信が次々と入って来る。「たまらない気持ちだった」というのは、本当にそうだろうなあと思わざるをえません。

しかも実際には、この長符連送を送信する以前にアメリカの艦載機に迎撃されて、墜落してしまった特攻機も少なくありません。「戦闘詳報」には「消息不明、未帰還」という記載もあります。敵艦に突入する直前に対空砲火で撃墜されてしまった特攻機も多数でした。

◎私の疑問

では敵艦に突入できたら本望と言えるのでしょうか。それはアメリカ兵を大勢死傷させるということです。上原良司の「所感」を読むと、アメリカ兵を殺したいとは微塵も思っていません。多くの特攻兵は「何のために自分は特攻するのか」と自問し煩悶しています。そういう苦悩に若者たちを追いこみ、死を強制した軍国主義の権力者に怒りをおぼえます。今、ウクライナに攻め込んでいるロシア軍の若者たちも、「自分はなぜ今、ウクライナにいるのか」と苦悩しているのではないでしょうか。



長符連送を受信した92式特改4受信機



日吉地下・電信室

連載

海外の戦跡めぐり (19) 阿片戦争とマカオ 中国

運営委員 佐藤宗達

16世紀初頭の大航海時代、富と布教の地を求めポルトガル人は東を目指し、インドのゴア、マラッカ、そしてマカオ付近に到達、明の海賊退治に協力して1557年マカオの居住権を得た。ポルトガルはマカオを中国と日本の中継貿易の貿易港とし巨額の富をえた。またマカオはアジアのキリスト教布教活動の基地となった。因みにフランシスコ・ザビエルは1552年中国・上川島で病死したが、遺骨の一部が回り回ってマカオの教会に安置されております。

英国もマカオの優位性に着眼、英國東インド会社はいち早くマカオに事務所を構えた。

中国との貿易のため、広州の商館に駐在員を置き取引をしていたが一年を通しての広州滞在が認められず、また家族の広州への帯同も認められず、家族をマカオに残して広州を行き来していた。また阿片取引はインドから運ばれてきた阿片を広州の沖合で備蓄船に積み替え、中国側からは備蓄船に引き取りに来た。マカオは広州沖の備蓄船の管理をするのに便利な場所であり、同社は1779年から1834年までマカオに船荷監督委員会本部を設置していた。林則徐は広東での阿片取り締まりに加え1839年マカオを視察、ポルトガルの役人に、英國へ加担しないで中立であること、阿片の清国への輸入禁止に協力するよう要請したが、ポルトガルのマカオ総督は清国の行政権行使を拒否することはできなかった。林則徐がマカオ視察時に宿泊した蓮峰廟（マカオ三大古廟の一つ）には1997年則徐記念館が建てられ視察時の様子や資料が展示されており阿片を輸送した箱のレプリカが置いてあります。

また近くの観音堂（マカオ三大古廟の一つ）には御影石の円卓と4個の椅子があります。

これは1844年7月、米国と清国とで締結された望厦条約（注1）の調印に使われた物のことです。南京条約にならい米国・清国間の友好通商条約です。ポルトガルも清国と1887年、中葡友好通商条約を締結、マカオはポルトガル海外領土となりました。そして香港が中国に返還されるとマカオも1999年12月中国に返還されました。



林則徐記念館内 阿片(Opium)輸送容器レプリカ

注1）望厦（ぼうか）はマカオ郊外の地名。アヘン戦争に敗れた清に対して、イギリスが南京条約を押しつけたことに便乗した米国が、直ちに使節を派遣して、1844年に清側に認めさせた条約。南京条約とほぼ同じ内容で関税自主権の喪失、治外法権などを定めた不平等な内容。



聖パウロ天主堂跡：石造りのファサード
(建物の正面部分)



観音堂庭内望厦条約の調印卓

報告

一般公開された「一式双発高等練習機」

運営委員 小山信雄

「期間限定でとても珍しい展示会があります」と職場の上司に教えていただいた私は、翌日の11/27(土)朝、早速展示会場へと足を運びました。会場はJR立川駅から徒歩15分程の(株)立飛リアルエステート南地区。ここは戦前まで(1945年迄)主として帝国陸軍の航空部隊を顧客とする軍用機を製造していた立川飛行機(株)の跡地であり、「赤とんぼ」の愛称で親しまれた九五式一型練習機や一式戦闘機「隼」の生産も行われていました。今回、11/25(木)~28(日)の期間限定で、当地で製造された練習機「一式双発高等練習機」の特別展示が行われることとなりました。

同機は、1939(昭和14)年3月、陸軍から多目的双発高等練習機の試作指示があり、立川飛行機(株)にとっては初めての双発、全金属製、引込脚の機体でした。操縦訓練だけに留まらず、航法、通信、射撃、写真撮影など、いわゆる機上作業全般に使用可能な練習機であり、エンジンの信頼性が高く機体の耐久性に優れ、また操縦席からの視界良好、機内も様々な訓練に対応できる広いスペースが確保されているなど、使い勝手に優れた傑作機でした。

1943(昭和18)年9月、開戦から二年足らずを経て劣勢に立たされつつあった大日本帝国は本土防衛、さらには戦争継続のために必要不可欠である領土を定めた、いわゆる絶対国防圏(千島、小笠原、内南洋=グアム・パラオ等のマリアナ諸島、ニューギニア、ビルマを含む圏域)をこの月末に設定し、米軍を迎撃体制を整えることとなりました。この時期、秋田県能代飛行場から飛び立ち、青森県八戸市高館飛行場へ飛び立った1機の陸軍機がエンジントラブルで、十和田湖に墜落したという事故が起きました。この機こそ、立川飛行場で総数1,342機製造された練習機「一式双発高等練習機」の一機でした。

時は経て、69年後の2012(平成24)年9月、青森県立三沢航空科学館館長 大柳繁造氏を中心とした引き揚げプロジェクトにより、十和田湖から「一式双発練習機」が引き揚げられ、三沢航空科学館に展示されておりましたが、同機の雄姿や、かつて立川飛行機を中心とした科学技術の最先端を誇っていた街の歴史を伝えるという使命のもと、(株)立飛ホールディングス(旧立川飛行機(株))が譲り受け、今回の一般公開に至ることとなりました。

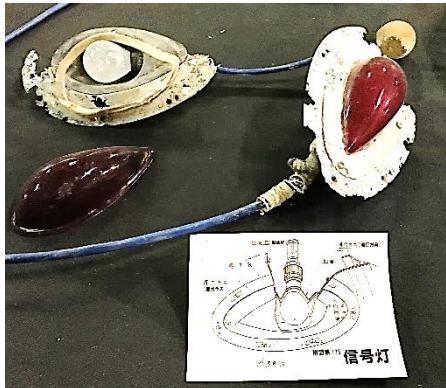
見学の当日(11/27)10時開場より30分程早めに会場入りしましたが、既に多くの見学者が集まっており、20分ほどのガイダンスビデオ(十和田湖からの引き揚げの様子等)の後、展示品の見学を行いました。胴体、エンジン、主翼、機内、操縦席等の他、信号灯、主脚「緩衝器」銘板、伝声管など細かい部品にいたるまで詳細に展示されており、しかもそれらの保存状態の良さに感銘しながら(機体の塗装や日の丸もはっきり見えます)、航空機の

内部の様子を見ることができ、大変貴重な見学を経験することができました。

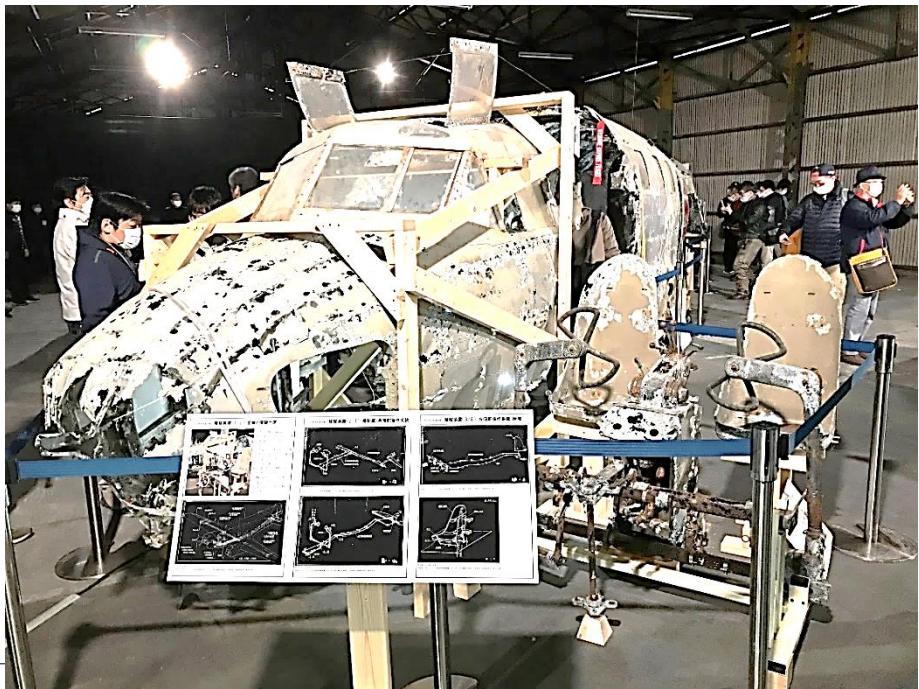
戦後、日本の軍用機は全て廃棄処分となった中、長期間水中(淡水)にあり、紫外線や塩分にさらされずにいた為に保存状態が良いまま、約80年振りにその姿を見ることが出来たことは、正に奇跡的なのです。現在、国内で現存する唯一の機体の“里帰り”に、4日間で9,000名以上の来場者があったとのこと。



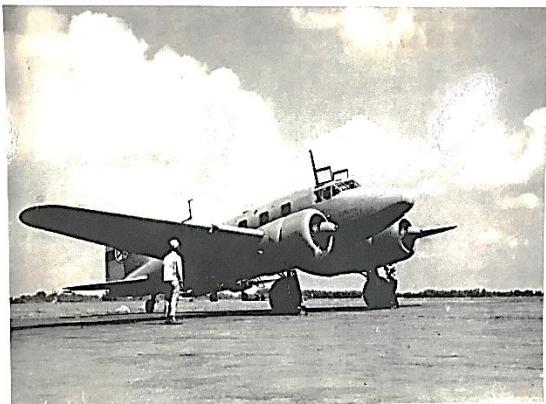
(株)立飛リアルエステート南地区 会場



信号灯



在りし日の旧陸軍一式双発高等練習機



一式双発高等練習機（F-S4）全長 19m、全高 12m、全幅 5m）
昭和16年から生産された陸軍練習機の4種類のうち最も初期の機体。また、昭和16年には、日本陸軍は、この機体を「一式双発高等練習機」として採用された。この機体は、日本軍で初めて量産された機体であることに注目されている。（写真は、陸軍航空兵学校で撮影されたもの）

旧陸軍一式双発高等練習機と搭乗員



一式双発高等練習機甲型
本機には、甲型、乙型、丙型がある。甲型は5～9人乗りの機上乗務員を機内に搭乗させるために、機内に座席を設けた。また、前部座席は、機長の座席である。また、機長の座席は、機長の座席である。



一式双発高等練習機 模型



伝声管



胴体部：真ん中が破断しており、胴体内部が見学できます

活動の記録 2021年11月～2022年3月

- 11/23(火) ガイド学習会(日吉地区センター)
 11/26(金) 会報148号発送(来往舎 小会議室)
 11/29(月) 「日吉台地下壕の史跡・文化財指定に関するお願ひ」を慶應義塾に提出
 11/30(火) 地下壕見学会 慶應義塾高校1年生・長野先生クラス 午前18名 午後28名
 　　ガイド7名
 12/9(木) 地下壕見学会 慶應義塾高校2年生・長野先生クラス 午前32名 午後35名
 　　ガイド6名
 1/13(木) 小学校出張授業用 PowerPoint 検討・運営委員会(慶應義塾高校 多目的室)
 1/15(土) ガイド学習会(日吉地区センター)
 2/24(木) 地下壕見学会 慶應義塾高校2年生選択旅行 午前40名 午後17名
 2/25(金) 同 午前36名 午後17名・教員8名 ガイド7名
 2/26(土) 定例見学会 ★定例見学会再開に向けてガイドの練習会(ガイド10名で感染
 　　防止対策・見学ルート・時間の確認 見学者の募集は無しで実施)
 3/3(木) 運営委員会(慶應義塾高校 多目的室)
 3/10(木) 小学校への出張授業 日吉台小学校6年生
 　　71名3クラス 5時間目 PowerPoint 画像を
 　　使ってリモート授業を行った ガイド4名



日吉台小学校の各クラスへのリモート授業 3月10日

○地下壕見学会について

慶應義塾から<月2回の定例見学会を1回に、定員を25名に>しての見学会再開の許可をいただいているが、コロナウィルス感染症の状況を見ながら、見学会の進め方などを検討中です。見学会を再開できる明るい春を迎えるものです。



春を告げるフクジュソウ



大倉山梅林

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会